

女子高校生の進路選択に関わる要因

鹿内啓子

目次

- ・ 問題・目的
- ・ 方法
- ・ 結果
- ・ 考察

I. 問題・目的

長い青年期をかけて自分にふさわしい職業を見つけ、その実現に向けて努力することは、エリクソンのアイデンティティ確立のプロセスの重要な部分である。ところが最近の我が国では、職業決定をしなければならない時になっても決定できない、あるいは決定しようとしないう若者が問題となっている。本来、重要な決定に向けて積極的に自己を模索することを意味するモラトリアムという言葉が、重要な決定の引き延ばしという意味で用いられることも多くなってきている。さらに今の就職難の現状では、しっかりした職業選択をしたとしても、それが実現困難であるために就職活動の過程の中でアイデンティティが揺らいでくることも考えられる。

ところで自分にふさわしい職業を決定するためには高校で適切な将来展望をもった進路選択をすることが重要であり、高校生の進路選択に関する研究が多くなされている。鈴木・柳井(1993)は、高校生の進路意識構造とし

て「適性重視の進路展望をもっている生徒は適性理解のための援助や適性重視の進路指導を求め、進路に対する不安が少なく、実現可能性に向かっての努力もしている。学力重視の進路展望をもっている生徒は適性理解のための援助は求めるが、その場合、学力重視の進路指導も求めるならば学力不足の悩みは少なく、実現可能性への努力もしている。しかし単に学力重視の進路展望をもつだけでは、学力不足に悩み実現への努力もしていない」という仮説モデルを考えた。これを共分散構造分析を用いて検討したところ、このモデルは妥当であることが示された。また鈴木・椎名・石塚・柳井(1997)は、全国の多数の高校生サンプルについて、学歴志向、学習努力、進路展望からなる進路意識と性別・成績・親の期待・高校の特徴などの要因との関連、また学業志向動機とモラトリアム動機からなる進学動機と進路意識との関連を検討した。その結果、進路展望が高いと学業志向動機が高くモラトリアム動機が低くなっており、進路展望が進学への動機づけのキーポイントであると述べている。

下山(1983, 1986)は進路意識がどの程度高いかという量的な側面だけでなく、進路選択状況がどのようなものであるかという質的側面に注目し、大学生の職業未決定の状態を未熟、混乱、猶予、模索、安直、決定の5つの次元で捉えられることを示した(下山, 1986)。藤巻・高木(1996)は、高校3年生の希望進

キーワード：進路選択、職業未決定、女子高校生、仕事イメージ、親の態度

路と下山 (1983) の進路決定地位との関連を検討した。これによると、大学希望者は早期完了、希望、猶予、危機が多く、短大希望者は達成が多くて希望が少なく、専門学校希望者は達成や早期完了が多くて模索と猶予が少なく、就職希望者は早期完了、防衛、無関心が多くなっていった。大学希望者は志望大学合格という近い将来のことで頭がいっぱいで長期の人生設計は立てられておらず、「なれるものになる」という考えが多いという。また希望進路と板柳・竹内 (1985) の職業的進路成熟尺度 (自立性、計画性、関心性の3下位因子をもつ) との関係については、専門学校希望者が3つの下位因子と全般的な成熟いずれでも高い傾向がみられた。

このように高校生の進路意識や進路決定状態が進路希望やその他の要因と強い関連性をもつことがこれまでの研究によって明らかにされてきた。

ところで進路選択過程に適応し、適切な進路選択をしていくためには自己効力感が必要であることが、多くの研究で指摘されている。進路選択に対する自己効力感とは、進路選択に至るまでに必要な行動を自分が遂行でき、その結果適切な進路選択ができるという有能感である。Taylor & Betz (1983) は、職業の効果的な意思決定には自分の決定能力に自信をもつことが必要であり、意思決定に関する自己効力が弱い場合には職業不決断などの問題をもたらす可能性があると考え、進路選択に対する自己効力感を測定する尺度 (Career Decision-Making Self-Efficacy Scale : CDMSE) を作成した。

浦上 (1993) は男女高校生を対象に Taylor & Betz (1983) の CDMSE と進路成熟態度尺度を6月と2月の2回実施し、その間の変化をみている。6月の時点で職業的進路成熟が高い者のうち、自己効力感も高ければ2月の時点でも高い進路成熟は維持されているが、自己効力感が低い場合には2月で低下していた。

また6月で進路成熟が低い場合には全体的に2月には進路成熟が上昇していたが、特に自己効力感が強い者で上昇が大きという結果が得られ、高い進路成熟を保つためには十分な自己効力感が必要であることを指摘している。また高須 (1997) は CDMSE を修正して5要因とし、進路に関する意識の8要因との関連を、自己効力感 進路意識 進路実現のための試みという経路を想定してパス解析によって検討している。その結果、自己効力感 は進路実現のための試みにポジティブに影響し、また希望進路未決定による不安を低減すること、結果予期の高さは学力不足による不安を低減することなどが明らかになった。

先に述べた鈴木他 (1997) は進路意識未成熟者の特徴を分析し、彼らは学業志向性が低くてモラトリアムが高いこと、将来の進路に影響する要因として運と能力を重視して努力を軽視すること、希望進路の実現可能性を低く認知するなどの特徴を指摘している。自己効力感という用語は使われていないが、このような特徴はまさに自己効力感の低さを表している。このように日本の高校生の進路選択においても自己効力感が大きな影響力をもっていることがいくつかの研究によって示されている。

高校生の進路選択に対しては、自己効力感のような個人の内的要因だけでなく、環境的要因も強い規定因となっている。高校生という発達段階から考えて親からの心理的離乳を完全には果たしていないと思われることから、環境的要因の中でも親・家庭の要因が重要であると考えられる。淵上 (1984) では、高校生の自由記述をもとに作られた進学志望動機項目について因子分析を行ったところ、大学の本来の機能の因子、モラトリアム機能の因子などととも「家族への配慮と規範機能」因子が見出された。また進学動機形成に際してもっとも影響を受けた人と進学動機のタイプとの関連をみたところ、父親を影響源と認

知している者では経済型の進学動機をもつ者が多く、母親を影響源と認知している者では家族への配慮型の動機をもつ者が多いという結果が得られた。古澤・山下(1993)では女子高校生を対象に、大学・短大、専門学校、就職の3つの志望群ごとに進路志望動機尺度の因子分析をおこなったところ、大学・短大志望群と就職志望群で「親の勧め・家族への配慮」因子が得られた。さらに鈴木他(1997)では、進路意識の学歴志向因子に親の期待が強い効果をもつことが明らかであった。

このように高校生の進路選択過程について、進路意識や自己効力感などの個人の認知的要因、性別や学業成績などのその他の個人内要因、および学校や家庭などの環境要因の影響が検討されてきた。しかし個人の認知的要因と環境に関わる要因を相互に関連させながら検討している研究は多くない。そこで本研究ではいくつかの未検討の要因を取り入れながら、進路決定状態に対して、職業選択に対する自己効力感、仕事というものについてもっているイメージ、仕事能力の自己評価、親の態度認知がどのような影響を及ぼしているかを検討していく。

「3K」とか「カリスマ」に代表されるような仕事を形容することばがマスコミを通じて流布し、仕事の実態よりも暗いとか華やかなどのイメージが一人歩きするようになってきている。残業や過労死など仕事の厳しさを示すことばもよく耳にするし、実際に父親などの様子をみて仕事の大変さを感じているだろう。大人になりたくないと思っている若者が最近増えてきているが、大人になりたくない理由として仕事に束縛されて自由がなくなることが挙げられているようである。このように仕事に対して漠然ともっているイメージが職業選択に対する態度に影響することは十分考えられる。そこで本研究では進路決定状態に影響を及ぼす要因の一つとして、仕事

イメージを取り上げる。

前述のように淵上(1984)および古澤・山下(1993)では、「家族への配慮」という進路志望動機が見出された。これは「親が勧める」、「親孝行のため」などの項目で構成されているものである。また淵上(1984)では、父親を一番の影響源と認知している高校生では大学の経済価値機能を志望動機としている者が多く、母親から影響を受けていると認知している者では家族への配慮を志望動機としている者が多いという結果が得られたが、経済機能と家族への配慮機能は父親と母親それぞれの役割に一致するものである。言い換えればこの結果は、高校生が父親または母親をモデルとしてその役割を自分の中に取り入れて進学動機を形成していることを示している。また実際に職業人としての親から有形無形にさまざまなことを学びながら職業への態度を形成する部分は大きいであろう。本研究では仕事に対する親の態度についての認知や子どもの進路選択に対する親の態度を、進路決定状態に影響する要因として取り上げる。

II. 方 法

1. 被調査者

札幌市内にある私立の共学高校、および女子高校の2年生女子生徒248名。この内、不備のない有効回答数は213名であった。なお男子生徒にも調査を実施したが、サンプル数が少なく女子とのアンバランスが大きかったので、今回は女子のデータだけで分析を行った。

2. 調査時期

2003年2月上旬。

3. 調査手続き

学級担任を通して学級ごとに都合のよい時間を利用して、集団実施の質問紙調査を行っ

ていただいた。

4. 調査の内容

(1) 進路選択に対する自己効力感尺度

浦上 (1995) が作成した、大学生と短大生を対象とした「職業選択に対する自己効力感尺度」から、項目を選択、修正した。本研究の被調査者の多くが進学希望であり、就職はまだ身近な問題ではないこと、またアルバイトの未経験者がかなりいることなどを考慮して、7項目を除き23項目とした。またこれらの項目については、高校生に適した表現に一部改めた。23項目それぞれについて、「まったく自信がない」から「ひじょうに自信がある」までの4段階評定を求めた。なお、この尺度は浦上 (1995) では1因子として扱われている。

(2) 職業未決定尺度

大学生の職業意識の状態を測定するために下山 (1986) によって作成された「職業未決定尺度」39項目から31項目を用いた。この尺度は、「未熟」、「混乱」、「猶予」、「模索」、「安直」、「決定」の6因子構造をもつ。高校生には不適切な項目、および実際の職業決定がまだ焦りを感じるほど差し迫った問題ではないことを考え、8項目を除き31項目とした。「未熟」6項目、「混乱」6項目、「猶予」5項目、「模索」5項目、「安直」5項目、「決定」4項目である。用いられた項目は表1の通りである。5段階評定を求めた。

(3) 仕事イメージ尺度

Osgood, C.E. (1957) がさまざまな概念の情動的意味を測定するために考案したセマンティック・ディファレンシャル法 (Semantic Differential Method: SD法) では、評価、力量性、活動性の3因子が見出されている。これらの3因子をそれぞれ

表している形容詞対、および高校生がもつ「仕事」のイメージ測定に適していると筆者が判断した形容詞対を合わせ、20対を用い、5段階評定をさせた。その内容は、表2に示した。

(4) 仕事能力自己評価尺度

若林・後藤・鹿内 (1983) による仕事に関する自己能力評価尺度の項目の一部を用いた。これは、企画力、指導力、総合的な判断力などからなる「有能性」、協調性、接遇能力、共感能力などからなる「協調性」、そして仕事を効率よく確実に処理し、持続力もある「確実性」の3因子から構成されている。高校生用に表現を変えて、「有能性」6項目、「協調性」4項目、「確実性」3項目の合わせて13項目を用い、5段階評定を求めた。内容は表3の通りである。

(5) 親との関係尺度

進路に関して親の態度をどのように認知しているのか、また親の仕事に対する態度をどのようにみているのかを測定するために、12項目を設け、5段階評定をさせた。項目内容を表4に示した。

(6) 進路決定要因

高校生の進路決定に影響を及ぼすと考えられる要因として、自分の能力や興味、家庭、友人、先生などに関して、12項目を用いた (5段階評定)。その内容は表5に示した通りである。

(7) 進路決定状況

調査時点で考えている進路について、「大学・短大に進学する」、「専修学校に進学する」、「就職する」、「その他」、「未定」の中から選択させた。さらに分野も決めている場合はそれも回答させた。

Ⅲ. 結 果

1. 各尺度の因子構造の検討

(1) 職業選択に対する自己効力感尺度

主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行ったところ、第 1 因子の固有値が突出しており、浦上（1995）でも 1 因子構造とされていることから、ここでも 1 因子構造をもつと判断した。I-T 相関を算出したところ、3 項目で低い相関係数がみられたのでこれを除外し、他のすべての項目の評定値の合計を自己効力感得点とした。係数は 0.916 であり、尺度の信頼性は高い。なお、得点が高いほど、自己効力感が高いことを意味する。

(2) 職業未決定尺度

主因子法（バリマックス回転）による因子分析を行った。固有値が 1 以上であることと因子の内容のまとまりのよさから、6 因子構造をもつと判断した。その結果を表 1 に示した。第 1 因子に負荷量の高い項目は、「自分のやりたい職業は決まっており、今はそれを実現していく途中である」、「自分なりに考えた結果、1 つの職業を選んだ」などであり、すでに将来の職業を決めている、または決める見通しをもっている状態を表している。第 1 因子は、「決定」因子と名付けた。第 2 因子では、「将来、誤った職業決定をしてしまうのではないかと不安がある」、「職業につけたとしてもうまくやっけていく自信がない」、「あらゆるものになれるような気持ちになる時と、何にもなれないのではないかと不安になる時がある」などで負荷量が高いので、職業への不安や混乱を表すものとして、「混乱」因子と名付けた。第 3 因子では「自分にとって職業につくことはそれほど重要なことではない」、「自分の将来の職業について真剣に考えたことがない」などで負

荷量が高く、「意欲の低さ」を示す因子である。第 4 因子に負荷量の高い項目は、「将来自分が働いている姿がまったく思い浮かばない」、「職業といわれても、まだ先のことのようにピンとこない」などであり、職業への「非現実感」を表すものである。第 5 因子については、「職業は決まっていらないが、今の関心を深めていけば職業につながってくると思う」や「これだと思う職業が見つかるまで、じっくり探していくつもりだ」などで負荷量が高く、職業に対して前向きに「模索」している状態を表す。最後に第 6 因子に高い負荷量を示す項目は、「採用してくれる所なら」あるいは「生活が安定するなら」「どのような職業でもよい」というものであり、職業に対する「安直」な態度を意味するものである。

(3) 仕事イメージ尺度

20 個の形容詞対について主因子法による因子分析をおこなった。固有値が 1.0 以上であることと意味のまとまりのよさを考慮して 5 因子を抽出し、バリマックス回転をしたところ表 2 のような結果となった。

第 1 因子については、負荷量の高い項目内容から、軽さ、暖かさ、やわらかさなどを意味していると判断し、「親近性」因子と名付けた。第 2 因子は、「非活動的 活動的」、「小さい 大きい」、「意欲的な 無気力な」で負荷量が高いことから、「力本性」の因子と解釈できる。第 3 因子は「明るい 暗い」、「好きな 嫌いな」の 2 項目で負荷量が高かったので、「暗さ」と名付けた。第 4 因子については、不安定性と貧しさを表すものと判断できるので、「不安定性」因子と名付けた。第 5 因子に負荷量の高い項目は、不誠実さ、弱々しさ、ふまじめさの 3 項目であったので、「非望ましさ」因子と名

付けた。

(4) 仕事能力自己評価尺度

13項目について主因子法による因子分析を行ない、固有値の推移と因子のまとまりのよさを考慮して2因子を抽出し、バリマックス回転を施したところ、表3のような結果が得られた。

第 因子に負荷量が高い項目は、統率力、総合的な判断力、企画力、プレゼンテーション能力、仕事の効率性や確実性などを表しており、「有能性」因子と名付けた。第 因子は、協調性、感情の自己コントロールなどを意味する項目で負荷量が高いことから、「対人的適応性」

表1 職業未決定尺度の因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果

	因子	I	II	III	IV	V	VI	共通性
		決定	混乱	意欲の 低さ	非現 実感	模索	安直	
6	自分のやりたい職業は決まっており、今はそれを実現していく途中である	0.76	0.02	-0.07	-0.07	-0.11	-0.21	0.64
17	自分なりに考えた結果、一つの職業を選んだ	0.71	-0.02	-0.19	-0.06	-0.22	-0.05	0.6
1	自分の職業計画は、着実に進んでいると思う	0.61	-0.25	-0.01	-0.19	0.11	-0.16	0.51
12	自分がよい職業決定をする自信がある	0.46	-0.36	0.03	-0.11	0.25	-0.02	0.41
16	職業に関する情報がまだ十分ないので、情報を集めてから決定したい	-0.52	0.27	-0.08	0.19	0.28	-0.01	0.46
14	自分の知っている職業の中でやりたい職業が見つからない	-0.53	0.26	0.27	0.3	0.06	0.16	0.54
27	自分が職業としてどのようなことがやりたいのかわからない	-0.6	0.37	0.28	0.3	0.09	0.1	0.68
18	将来、誤った職業決定をしてしまうのではないかと不安がある	-0.28	0.74	0.02	0.16	0.12	0.06	0.67
20	職業につけたとしても、うまくやっていく自信がない	-0.15	0.68	0.23	0.13	-0.01	0.09	0.56
25	あらゆるものになれるような気持ちになる時と、何にもなれないのではないかという気持ちになる時がある	-0.12	0.55	0.08	0.1	0.28	0.03	0.41
19	いつも実現できないような職業ばかり考えている	-0.05	0.53	0.14	0.14	0.14	0.14	0.36
3	望む職業につけないのではないかと不安になる	0	0.5	-0.26	-0.05	0.11	0	0.33
22	自分ひとりで職業を決める自信がない	-0.32	0.46	0.32	0.21	0.05	0.26	0.53
15	これまで自分自身で決定する経験が少なく、職業決定のことを考えると不安になる	-0.37	0.45	0.05	0.27	0.05	0.14	0.43
21	自分にとって職業につくことは、それほど重要なことではない	0	-0.08	0.72	-0.01	0.08	0.09	0.54
31	自分の将来の職業について真剣に考えたことがない	-0.33	0.17	0.58	0.27	-0.13	0.13	0.58
24	将来の職業については、考える意欲がわかない	-0.42	0.24	0.58	0.22	-0.08	0.17	0.65
28	できることなら職業などもたず、いつまでも好きなことをしたい	-0.02	0.19	0.44	0.35	0.16	0.17	0.41
9	将来自分が働いている姿がまったく思い浮かばない	-0.32	0.26	0.22	0.69	0.04	0.04	0.7
8	職業といわれても、まだ先のことでピンとこない	-0.36	0.28	0.12	0.67	0.13	0.17	0.72
10	職業を最終的に決定するのはまだ先のことで、今はいろいろなことを経験してみる時期である	-0.21	-0.03	0.16	0.4	0.34	0.18	0.38
29	職業は決まっていないが、今の関心を深めていけば職業につながっていくと思う	-0.21	0.07	0.06	0.14	0.6	-0.08	0.44
26	これだと思う職業が見つかるまで、じっくり探していくつもりだ	-0.31	0.2	-0.03	0.1	0.53	-0.18	0.46
4	将来やってみたい職業がいくつかあり、それらについていろいろ考えている	0.04	0.15	-0.13	-0.1	0.44	0.06	0.25
11	自分を採用してくれる所なら、どんな職業でもよい	-0.21	0.18	0.22	0.17	-0.03	0.75	0.72
5	生活が安定するなら、どのような種類の職業でもよい	-0.15	0.09	0.11	0.09	0.03	0.52	0.32
2	できることなら職業につくことを、先に延ばし続けたい	0.01	0.1	0.37	0.36	0.25	0.24	0.4
7	自分がどのような職業に適しているのか、わからない	-0.48	0.4	0.04	0.47	0.07	0.14	0.64
13	自分の職業についてはいろいろ考えるが、一貫性がなく、次々に変わっていく	-0.36	0.31	0.21	-0.02	0.33	0.23	0.44
23	今の状態では、自分の一生の仕事などみつきりそうもない	-0.41	0.44	0.4	0.32	-0.14	0.09	0.64
30	学歴や“ツテ”を利用して、よい職業につきたい	0.14	0.01	0.13	0.15	0.35	0.1	0.19
固有値		4.25	3.57	2.37	2.34	1.69	1.4	15.61
説明率 (%)		13.7	11.5	7.63	7.56	5.44	4.52	50.35

女子高校生の進路選択に関わる要因

表2 仕事イメージの因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果

因子	I	II	III	IV	V	共通性
	親近性	力本性	暗さ	不安定性	非望ましき	
13 重いー軽い	0.61	0.01	0.05	-0.03	0.07	0.38
16 不自由なー自由な	0.61	0.18	-0.25	-0.07	-0.05	0.47
20 冷たいー暖かい	0.59	0.3	-0.37	-0.05	-0.01	0.58
5 不公平なー公平な	0.56	-0.01	-0.1	-0.06	-0.24	0.38
10 かたいーやわらかい	0.55	0.11	-0.23	-0.1	0.24	0.43
4 親しみにくいー親しみやすい	0.46	0.15	-0.37	0	-0.05	0.37
7 丸いー四角い	-0.54	0.07	0.26	0.16	-0.29	0.47
11 非活動的なー活動的な	0.07	0.63	-0.12	-0.1	-0.25	0.49
18 小さいー大きい	-0.01	0.5	-0.01	-0.23	-0.18	0.34
15 意欲的なー無気力な	-0.09	-0.59	0.32	0.31	0.24	0.61
9 明るいー暗い	-0.25	-0.26	0.67	0.19	0.22	0.66
6 好きなー嫌いな	-0.2	-0.15	0.63	0.11	0.13	0.48
17 安定したー不安定な	-0.07	-0.15	0.05	0.72	0.24	0.63
19 豊かなー貧しい	-0.16	-0.37	0.17	0.7	0.01	0.65
3 誠実なー不誠実な	-0.1	-0.15	0.12	0.12	0.56	0.37
1 力強いー弱々しい	0	-0.37	0.12	0.1	0.42	0.34
8 ふまじめなーまじめな	-0.12	0.25	-0.01	-0.04	-0.52	0.35
2 感情的なー理性的な	-0.16	0.06	0.33	-0.08	-0.3	0.23
12 おもしろいーつまらない	-0.31	-0.47	0.47	0.26	-0.06	0.6
14 むなしー充実した	0.42	0.7	-0.16	-0.04	-0.15	0.71
固有値	2.66	2.34	1.83	1.36	1.36	9.54
説明率 (%)	13.28	11.68	9.17	6.8	6.79	47.71

表3 仕事能力自己評価の因子分析（主因子法・バリマックス回転）の結果

因子	I	II	共通性
	有能性	対人適応性	
6 一定の目標に向けて、他の人々を引っ張っていく能力	0.85	0.17	0.75
7 いろいろな情報を総合し、どうすべきかの確かな判断を下す能力	0.74	0.17	0.58
2 与えられた仕事を限られた時間内に効率よく処理する能力	0.6	0.19	0.39
1 企画を思いつき、その達成のための計画を立てる能力	0.6	0.24	0.41
5 自分の考えをきちんと要領よく相手に伝える能力	0.6	0.18	0.39
8 細かいところまで神経が行き届き、注意深く仕事をする能力	0.48	0.37	0.37
9 他の人と協調し、お互いに助け合って仕事をする能力	0.12	0.69	0.49
3 相手の気持ちを考え、誰にでも親切な対応ができる能力	0.23	0.68	0.52
4 いやなことがあっても、感情的にならず、平常心を保って笑顔で対応できる能力	0.18	0.61	0.41
13 いろいろな人と広い人間関係をつくっていく能力	0.21	0.59	0.39
11 自分とは違った意見でも拒否せず、それらを検討し、よいところは取り入れる能力	0.12	0.54	0.31
10 失敗を恐れず、自分を試す機会に積極的に挑戦する態度	0.38	0.38	0.29
12 細かい仕事や反復作業を、長時間こつこつと行う能力	0.16	0.27	0.09
固有値	2.9	2.48	5.38
説明率 (%)	22.32	19.04	41.36

因子と名付けた。

(5) 親の態度認知尺度

12項目について主因子法による因子分析を行ない、固有値の推移と因子のまとまりから4因子構造をもつと判断し、バリマックス回転を施した結果、表4の通りとなった。

第1因子は、「親は自分の仕事にやり

がいを感じていると思う」、「仕事をしている親を尊敬できる」、「親が生き方を考える時の1つのモデルになっている」などの項目で負荷量が高いことから、「望ましいモデル」因子と名付けた。第2因子は、進路について話し合ったり、親が仕事での問題を話して子どもの意見を求めるという項目で負荷量が高いので、

表4 親の態度認知についての因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果

因子	I	II	III	共通性
	望ましい モデル	コミュニ ケーション	指示的態度	
6 親は自分の仕事にやりがいを感じていると思う	0.74	-0.07	-0.06	0.55
12 仕事をしている親を尊敬できる	0.58	0.34	-0.2	0.49
4 親は私が生き方を考える時の1つのモデルになっている	0.53	0.34	0.05	0.4
7 親は、自分の仕事の様子や出来事を家で話題にする	0.43	0.3	0.33	0.38
3 親が仕事をしている姿をみる機会がある	0.42	0.1	0.09	0.19
1 進路についてよく親と話し合う	0.17	0.75	-0.05	0.59
2 親は、自分の仕事での悩みや困り事を家で話して、あなたの意見を求める	0.07	0.64	0.28	0.49
5 親は、私の進路についていろいろ指図する	0.07	0	0.57	0.33
10 親は、仕事での愚痴を家でいう	-0.04	0.22	0.55	0.35
8 進路や将来の職業について、親の期待を強く感じる	0.26	0.23	0.37	0.26
11 親は、私の進路の決定を私に任せてくれる	0.22	0.32	-0.49	0.39
9 親は、将来の仕事や人生についてアドバイスをくれる	0.47	0.57	0.11	0.56
固有値	1.9	1.83	1.26	4.99
説明率(%)	15.82	15.26	10.51	41.58

表5 進路決定因子の因子分析(主因子法・バリマックス回転)の結果

因子	I	II	III	IV	共通性
	適性	家庭・教師	友人	身近なモデル	
7 自分の興味に合うから	0.67	-0.18	-0.27	0	0.56
10 本などで調べて面白そうだったから	0.66	0.04	0.03	-0.11	0.45
4 自分が将来希望する職業に結びつくから	0.61	-0.08	-0.13	0.34	0.51
1 自分の能力や適性を活かせるから	0.56	0.11	-0.01	0.05	0.33
6 親のアドバイスがあったから	-0.17	0.64	0.02	0.22	0.49
5 家の経済的状況を考えたから	0.22	0.6	0.18	-0.16	0.47
3 親の期待や希望があったから	-0.08	0.58	0.11	0.35	0.47
8 先生のアドバイスがあったから	0.08	0.46	0.29	0.19	0.34
9 友だちの進路がそうだったから	-0.22	0.1	0.67	0.01	0.51
2 友だちの意見やアドバイスがあったから	-0.11	0.38	0.53	0.28	0.52
12 身近にそのような仕事をしている人がいるから	0.02	0.19	0.08	0.67	0.49
11 先輩から情報を得たから	0.14	0.13	0.28	0.32	0.22
固有値	1.74	1.59	1.03	0.99	5.34
説明率(%)	14.49	13.21	8.61	8.21	44.52

「コミュニケーション」の多さを表すものと判断できる。第 1 因子に高い負荷量を示す項目は、進路についての親の指図や期待の強さに関するものであり、「指示的態度」因子と名付けた。

(6) 進路決定要因尺度

12項目について主因子法(バリマックス回転)による因子分析を行ない、固有値の推移と因子のまとまりのよさを考慮して4因子を抽出した。その結果は表5に示した。第 1 因子は、自分の興味や適性による進路決定を表す項目で負荷量が

高いことから、「適性」因子と名付けた。第 2 因子は、親のアドバイスや期待、家庭の経済状況、教師のアドバイスに関する項目で負荷量が高いので、「家庭・教師」因子と解釈できる。第 3 因子については、友人の進路やアドバイスが決定要因となっており、「友人」因子と名付けた。最後の第 4 因子については、固有値が1.0に満たなかったが、「身近にそのような仕事をしている人がいるから」という項目だけが高い負荷量を示していることから、この1項目だけで「身近なモデ

ル」因子とした。

2. 各要因についての進路決定群と進路未決定群との比較

ここでは大学・短大、専修学校、就職という3つの進路の違いを考慮せず、いずれにおいても志望学部や分野を決めている場合を進路決定群、学部や分野が未定の場合を進路未決定群とし、各尺度について両群を比較検討した。いずれの尺度についても、各因子の得点を従属変数とする1要因の分散分析をおこなった。

(1) 自己効力感と職業未決定尺度

有意な効果が得られた因子は、自己効力感($F=12.27$, $df=1/205$, $p<0.001$), 決定($F=13.00$, $df=1/205$, $p<0.001$), 意欲の低さ($F=7.06$, $df=1/205$, $p<0.01$)であった。また混乱で有意な傾向がみられた($F=3.64$, $df=1/205$, $p<0.1$)。表6に平均値を示

した。未決定群よりも決定群で自己効力感が高く、決定傾向が高く、意欲が高いという結果であった。混乱では両群の差は有意でなかったが、未決定群で混乱が高くなっている。

(2) 仕事イメージ

有意な効果が得られたのは「不安定性」($F=6.19$, $df=1/205$, $p<0.05$)だけであったが、「非望ましさ」($F=3.15$, $df=1/205$, $p<0.1$)と「力本性」($F=2.80$, $df=1/205$, $p<0.1$)で有意な傾向がみられた。表7で平均値をみると、決定群よりも未決定群で不安定なイメージをもっている。「非望ましさ」と「力本性」では両群の差は有意でなかったが、決定群のほうが望ましく活動的なイメージをもっていることがわかる。

表6 進路決定群と進路未決定群の自己効力感と職業未決定因子の平均値

n			自己効力感	職業未決定因子					
				決定	混乱	意欲の低さ	非現実感	模索	安直
決定群	131	平均値	2.57	3.22	2.55	1.8	2.83	2.81	2.02
		SD	0.5	0.87	0.82	0.76	0.97	0.84	0.86
未決定群	76	平均値	2.32	2.79	2.77	2.11	3.05	2.9	2.12
		SD	0.46	0.75	0.72	0.92	0.91	0.87	0.76
有意性			**	**	△	**			

** $p<0.01$, △ $p<0.1$

表7 進路決定群と進路未決定群の仕事イメージの平均値

n			仕事イメージ因子				
			親近性	力本性	暗さ	不安定性	非望ましさ
決定群	131	平均値	2.66	3.68	2.66	2.66	2.18
		SD	0.7	0.75	0.94	0.84	0.69
未決定群	76	平均値	2.6	3.5	2.82	2.97	2.35
		SD	0.56	0.7	0.89	0.85	0.61
有意性				△		*	△

* $p<0.05$, $p<0.1$

(3) 仕事能力自己評価

「有能性」と「対人適応性」のいずれにおいても有意な効果は得られなかった。両群の平均値は表8の通りである。

(4) 親の態度認知

3因子のいずれにおいても有意な効果はみられなかったが、「コミュニケーション」(F=2.81, df=1/205, p<0.1)では有意な傾向がみられた。両群の平均値の差は有意ではないが、表9で平均値をみると決定群でコミュニケーションが多い傾向にある。

3. 各要因についての大学・短大分野決定群と専修学校分野決定群との比較

本研究の調査対象者では、大学・短大への進学希望者が158名、専修学校への進学希望者が29名であり、この2群で大部分を占め、就職希望者はわずか9名であった。また大学・短大と専修学校志望者の多くが分野を決定していた。そこで分野を決定している者の中で

大学・短大希望者と専修学校希望者との比較をしてみる。いずれの尺度についても、各要因の得点を従属変数とする1要因の分散分析をおこなった。

(1) 自己効力感と職業未決定尺度

自己効力感では有意な効果がみられなかったが、職業未決定の「決定」因子(F=5.73, df=1/127, p<0.05)と「模索」因子(F=4.87, df=1/127, p<0.05)で有意な効果が得られた。表10に各因子の両群の平均値を示したが、大学・短大群よりも専修学校群で「決定」状態が高く、「模索」傾向が弱いという結果となっている。

(2) その他の尺度

仕事イメージ、仕事能力評価、親の態度認知について分析をおこなったが、どの因子においても進路による効果は有意ではなかった。各因子の平均値は表11~13の通りである。またここでは進路決定要因についても同様に分析したが、どの因子でも有意な効果はみられなかった。

表8 進路決定群と進路未決定群の仕事能力自己評価の平均値

			仕事能力因子	
			有能性	対人適応性
決定群	131	平均値	2.76	3.14
		SD	0.71	0.74
未決定群	76	平均値	2.62	2.99
		SD	0.69	0.58

表9 進路決定群と進路未決定群の親の態度認知の平均値

			親の態度認知因子		
			望ましいモデル	コミュニケーション	指示的態度
決定群	131	平均値	3.08	3.05	2.52
		SD	0.81	1.12	0.84
未決定群	76	平均値	3.06	2.8	2.38
		SD	0.85	0.89	0.71
有意性				△	

△ p<0.1

女子高校生の進路選択に関わる要因

表10 自己効力感と職業未決定尺度の大学・短大と専修学校の分野決定群の平均値

n			自己効力感	職業未決定因子					
				決定	混乱	意欲の低さ	非現実感	模索	安直
大学・短大	103	平均値	2.53	3.12	2.56	1.77	2.85	2.91	1.99
		SD	0.48	0.86	0.75	0.72	0.95	0.83	0.82
専修学校	26	平均値	2.67	3.57	2.6	1.87	2.8	2.5	2.17
		SD	0.6	0.87	1.09	0.93	1.09	0.92	1.04
差の有意性				*				*	

* p<0.05

表11 仕事能力についての大学・短大と専修学校の分野決定群の仕事能力評価の平均値

n			仕事能力因子	
			有能性	対人適応性
大学・短大	103	平均値	2.73	3.09
		SD	0.73	0.73
専修学校	26	平均値	2.83	3.25
		SD	0.66	0.71

表12 仕事イメージについての大学・短大と専修学校の分野決定群の平均値

n			仕事イメージ因子				
			親近性	力本性	暗さ	不安定性	非望ましき
大学・短大	103	平均値	2.64	3.72	2.71	2.71	2.22
		SD	0.71	0.73	0.97	0.81	0.68
専修学校	26	平均値	2.72	3.54	2.5	2.58	2.05
		SD	0.7	0.83	0.82	0.88	0.76

4. 職業未決定状態に及ぼす諸要因の影響の検討

職業未決定の種々の様態がどのような要因と関連しているのかを検討するために、職業未決定尺度の6因子をそれぞれ従属変数とし、自己効力感、仕事イメージの5因子、仕事能力の2因子、親の態度認知の3因子を説明変数とする重回帰分析を行った。得られた標準化偏回帰係数は表14の通りである。

自己効力感は「決定」に対して有意な正の寄与を示し、「混乱」、「意欲の低さ」、「非現実性」、「安直」に対しては負の有意な寄与を示していた。「模索」に対しては有意な寄与

をしていなかった。

仕事イメージの因子は全般的に有意な寄与が少ない。「親近性」が「非現実感」と「模索」に対して有意な負の寄与を示し、「力本性」が「意欲の低さ」に有意な正の寄与を、また「不安定性」が「安直」に対して有意な負の寄与を示している。

仕事能力については、「有能性」が「意欲の低さ」と「模索」に有意な正の寄与をし、「対人適応性」が「混乱」に対して有意な正の寄与をしていた。

最後に親の態度認知では、「望ましいモデル」が「決定」に対して有意な負の、また

表13 親の態度認知についての大学・短大と専修学校の分野決定群の平均値

			親の態度認知因子		
			望ましいモデル	コミュニケーション	指示的態度
大学・短大	n	103			
	平均値		3.07	3.01	2.47
	SD		0.77	1.1	0.84
専修学校	n	26			
	平均値		3.15	3.24	2.62
	SD		0.99	1.22	0.9

表14 職業未決定因子についての重回帰分析

		決 定	混 乱	意欲の低さ	非 現 実 感	模 索	安 直
重 相 関 係 数		0.75	0.59	0.52	0.59	0.4	0.42
自 己 効 力 感		0.68	-0.48	-0.37	-0.58	-0.13	-0.43
仕 事 イ メ ー ジ	親 近 性	0.08	-0.07	0.04	-0.14	-0.2	0.03
	力 本 性	0.06	-0.03	-0.22	0	0.07	0
	暗 さ	-0.1	0.04	-0.02	-0.06	0.07	0
	不 安 定 性	-0.01	0.07	0.12	-0.02	0.04	-0.18
	非 望 ま し さ	-0.06	0.07	-0.02	0.02	0.1	0.15
仕 事 能 力	有 能 性	0.01	-0.1	0.16	0.01	0.17	0.13
	対 人 適 応 性	-0.1	0.18	-0.13	0.03	0	0.11
親 の 態 度 認 知	モ デ ル	-0.12	0.09	0.05	0.12	0.2	0.07
	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	0.03	0	-0.02	-0.03	0.15	-0.04
	指 示 的 態 度	0	0.2	0.03	-0.03	0.09	0.02

太字は p<0.05で有意

「模索」に対しては有意な正の寄与を示している。「指示的態度」は「混乱」に対して有意な正の寄与を示していた。

5. 進路決定要因に及ぼす諸要因の影響の検討

進路決定要因に対して個人の内的要因や環境要因がどのように関連しているかを検討するために、進路決定の4要因のそれぞれの得点を従属変数とし、自己効力感、仕事イメージの5因子、仕事能力の2因子、親の態度認知の3因子を説明変数とする重回帰分析を行った。表15がその結果である。

まず適性要因については自己効力感が正の強い寄与を示し、仕事イメージの「不安定性」が有意な正の寄与をしていた。家庭・教師要

因については自己効力感に有意な寄与を示さず、それに代わって親の態度認知の「望ましいモデル」と「指示的態度」とが有意な正の寄与を示している。とくに「望ましいモデル」はかなりの関連性をもっている。友だち要因に対しては自己効力感が有意な負の寄与を示し、「望ましいモデル」が有意な正の寄与を示している。最後に身近なモデル要因については、仕事能力の「有能性」と親の態度認知の「望ましいモデル」が有意な正の寄与を示した。

IV. 考 察

1. 進路決定群と進路未決定群の比較

未決定群よりも決定群で自己効力感が高い

女子高校生の進路選択に関わる要因

表15 進路決定要因についての重回帰分析・標準化偏回帰係数

		適 性	学 校 ・ 教 師	友 だ ち	身 近 な モ デ ル
重 相 関 係 数		0.67	0.5	0.35	0.48
自 己 効 力 感		0.62	-0.05	-0.24	0.07
仕事イメージ	親 近 性	0	-0.21	0	0.04
	力 本 性	-0.04	-0.03	0.16	0.11
	暗 さ	0.08	-0.1	-0.08	0.12
	不 安 定 性	0.17	-0.03	0.07	-0.11
	非 望 ま し さ	-0.13	-0.1	0.09	-0.14
仕事能力	有 能 性	0.15	0.12	0.07	0.22
	対 人 適 応 性	-0.04	0.05	0.18	-0.09
親の態度認知	望 ま し い モ デ ル	-0.07	0.33	0.21	0.28
	コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	0.08	0.09	-0.03	0.06
	指 示 的 態 度	-0.02	0.19	0.05	0.14

太字は $p < 0.05$ で有意

が、進路選択に対する自己効力感であるのでこの結果は当然のことである。また同様に職業未決定尺度の「決定」で決定群の得点が高く、「混乱」では低いことも、「決定」と「混乱」の因子の項目の妥当性を示すものであろう。「意欲の低さ」でも決定群のほうが低い得点を示し、職業決定に対して積極的な姿勢がみられる。

仕事イメージについては、明瞭な違いはみられなかったが、全般的に決定群のほうが仕事に対して安定し豊かで活動的な好ましいイメージをもっていた。本研究の被調査者の中にはアルバイトなど実際に仕事をした経験をもっているものもいるであろうが、多くは仕事の経験がないと思われる。したがって仕事のイメージは体験に基づいたものではなく、まさに仕事ということばからのイメージであるため、そこには仕事、あるいは職業をもつことに対する構えが反映される。弱い差異ではあったが、両群でイメージの差がみられたのはやはり両群の職業への姿勢の違いを示すものと考えられる。

親の態度の認知に関しては、コミュニケーションで両群の差が有意な傾向にあり、未決

定群よりも決定群でコミュニケーションが多い傾向がみられた。しかし「望ましいモデル」と「指示的態度」では差がみられなかった。親の態度認知については後ほど考察を加える。

2. 分野決定群における大学・短大と専修学校との比較

自己効力感については両群の差はみられなかったが、職業未決定尺度の「決定」と「模索」において有意差がみられ、「決定」については専修学校群が、「模索」については大学・短大群の得点が高かった。藤巻・高木(1996)では希望進路による進路決定地位の比較がなされたが、専門学校希望者では達成と早期完了が多くて模索と猶予が少なく、また進路成熟尺度の自立性、計画性、関心性という3因子のいずれも高いという結果が得られた。本研究の結果はこれと一致するものである。専門学校では分野の決定は職業の決定に直結するが多いのに対して、大学・短大では専攻が職業にそのままつながるわけではない。分野を決定してもとりあえずは大学合格を目指し、職業については入学後にゆっくり考えるという構えをもつ者も多いと思わ

れる。

仕事イメージ、仕事能力自己評価、親の態度認知、進路決定要因についてはどの因子でも両群の差がみられなかった。これらの要因は進路の決定状態には関係するが、どのような進路に決めるのかということに対しては影響を及ぼさないと考えられる。

3. 親の態度認知の要因

本研究では、高校生の進路選択には親の影響が大きいと考え、子どもが職業人としての親をどのようにみているかを検討した。因子として、親が子どもから仕事にやりがいを感じていると認知され、尊敬され、仕事の話を書く機会も多いなどの親が職業人として子どもの「望ましいモデル」になっているというもの、親子が進路や仕事についてよく話題にするという「コミュニケーション」、親が子どもの進路について期待したり指図したりする「指示的態度」の3つが得られたが、全般的にあまり大きな影響はみられなかった。

この理由としては主に2点が考えられよう。1つは、本研究の対象者が女子高校生だったことである。多くの場合職業人のモデルとなるのは父親と考えられる。そのため男子にとっては同性の職業人として父親から受ける影響は大きいと考えられるが、女子の場合には異性の親はモデルになりにくいことから、親の影響があまりみられなかったものと思われる。もう1つの理由としては、仕事をしている親の姿を目にする機会がほとんどなく、これに加えて親とコミュニケーションをもつことも減ってきているので、親がどのような考えをもちどのような態度で仕事をしているのかを子どもが知る機会がなくなっていることが考えられる。親から職業に関して学ぶ機会が少なくなっているのであれば、親の影響も当然弱くなっていくであろう。

しかし、「望ましいモデル」因子は「決定」には寄与していなかったが、「模索」に対し

ては弱いながらも正の有意な寄与を示していた。「模索」は決定には至っていないが積極的に進路選択をしようとする姿勢を表しており、ここから親が「望ましいモデル」になっていることが、進路に対する子どもの前向きな構えに影響している可能性がうかがえる。

[引用文献]

- (1) 淵上克義 1984 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究, 32, 59-63
- (2) 藤巻かおり・高木秀明 1996 高校生の進路態度についての一研究 横浜国立大学教育紀要, 197-204
- (3) 古澤照幸・山下利之 1993 女子高校生の進路志望動機と進路決定 社会心理学研究, 8, 98-106
- (4) 板柳恒夫・竹内登規夫 1985 進路成熟度尺度 (CMAS-4) の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告 (教育科学編), 35, 169-182
- (5) 下山晴彦 1983 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究 教育心理学研究, 31, 157-162
- (6) 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30
- (7) 鈴木規夫・柳井晴夫 1993 因果関係モデルによる高校生の進路意識の分析 教育心理学研究, 41, 324-331
- (8) 鈴木規夫・椎名久美子・石塚智一・柳井晴夫 1997 高校生の進路選択に関わる要因分析 大学入試センター研究紀要, 26, 1-27
- (9) 高須真紀子 1997 高校生の進路意思決定に関する因果モデル作成の試み—自己効力理論の視点から— 立正大学哲学心理学会紀要, 23, 17-29
- (10) Taylor, K.M., & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision Journal

女子高校生の進路選択に関わる要因

of Vocational Behavior, 22, 63-81.

- (11) 浦上昌則 1993 進路選択に対する自己効力
と進路成熟の関連 教育心理学研究, 41,
358-364

[Abstract]

A Study of Factors Related to Career Choice of Female High School Students

Keiko SHIKANAI

The career choice of high school students after graduation is a very important decision for their lives. Many studies have investigated various factors related to their career choices. The purpose of this study was to investigate factors related to the career decision status of female high school students. Factors discussed in this study are career decision-making self-efficacy, occupation-image, cognition of parents' stance on jobs and self-evaluated competence.

The main findings are as follows:

- (1) Students who decided the course after graduation are more self-efficient and have higher motivation for occupations than students of indecision status.
- (2) Students who decided to go on to technical college have more definite prospects for occupation than students in the course for university.
- (3) Whether parents are positive models of workers or not has no clear effect on career decision status and occupation-image. This finding is interpreted as female students having difficulty in modeling after their fathers. Lack of communication between fathers and daughters also causes difficulty in modeling.

Key words : career choice, career decision-making self-efficacy, female high school students, occupation-image, cognition of parent's stance on job